

近代家庭教育論における理想的母親像の形成

— ペスタロッチーの妻アンナ像の受容をめぐって —

鈴木 由美子
(1998年10月1日受理)

The Establishment of an Image of the ideal Mother in the Theory of Modern Home Education

— The Receptin of an Image of Pestalozzi's Wife Anna —

Yumiko SUZUKI

Since 1987, there are new tendency of Pestalozzi research. In this tendency, Mrs. Anna, Pestalozzi's wife, appeared one of the modern woman who thought and behaved herself. In Japan, from early 20th century, Anna has regarded as the most suitable wife for Pestalozzi, because of her perseverance and submissions, and this view still remains today. The purpose of this paper is to make clear the reason why the image of Anna has unchanged in Japan.

The reason why Anna has idolized is explained from two points. One is the influences of "a principle of good wife and wise mother (Ryosai Kenbo Syugi)" as a national policy in Japan. And another is the influences of the social class that received the Pestalozzi's educational ideas in Japan. As the result, it is important for the re-interpretation of Pestalozzi to think about the influences of the national policy and the social structure of the times received his ideas.

Key words : Pestalozzi, the image of ideal mother, the theory of home education, ペスタロッチー, 理想的母親像, 家庭教育論.

はじめに

1970年代にはじまるポスト・モダンの思潮は、教育学研究にも大きな影響を与えてきた。従来の枠組みはずしと新たな枠組みの提案が求められており、その方法論をめぐって議論がおこなわれている。ペスタロッチー研究も例外ではない。

1987年にベルン大学で開催された国際シンポジウム「ペスタロッチーの遺産—彼の擁護者に対する弁明」を転回点として、スイスにおけるペスタロッチー研究は今新たな地平に立ちつつある⁽¹⁾。トレーラーが指摘するように、ペスタロッチーを英雄視して、ただ賛美する時代は終わり、歴史的文脈において批判的に吟味すること、それとともに、批判的に吟味する際の視点と方法を確立することが必要となってきた⁽²⁾。そのためのひとつの視点として、本論では近代家庭教育論にお

いて理想的母親像がどのように形成されてきたのかについて、とくにペスタロッチーの妻アンナ像の日本への受容を中心にして考察することにする。

1996年1月におこなわれたペスタロッチー生誕250年記念式典で、ペスタロッチーの歴史的貢献や今日的意義に関する報告・講演とならんで重要な位置を占めたのは、今日的なアンナ解釈であった⁽³⁾。ここでは、幾度となく訪れた困難に際し、アンナが自立した近代的な女性として才能を現し、ペスタロッチーを支えたことが指摘されている。アンナはたしかに「ペスタロッチーにふさわしき妻」であったが、もっぱら夫の陰に隠れていたのではなく、自分の意志と能力で夫のために全力を尽くした女性であったと、評価されているのである⁽⁴⁾。

また、1996年に出版された『ペスタロッチーの

足跡』のなかでは、「アンナの力は有徳さ (Tugendhaftigkeit)、勇敢さ (Tapferkeit) ならびに献身的な意志 (Aufopferungsbereitschaft) にあり、ペスタロッターもそれゆえに彼女を愛した」といったアンナ評価がなされている⁽⁵⁾。また1798年に、ペスタロッターがひとりシュタンスへ赴く際にもアンナが反対したという事実、ペスタロッターはノイホーフでの仕事を継続させるために、アンナをひとり残したという事実が示されている⁽⁶⁾。従来のような「ペスタロッターにふさわしき妻」としてのアンナ像に加え、ひとりの女性として生きたアンナ像が示されてきているといえよう。

これに対しわが国においては、アンナ像に対する体系的な批判的検討がなされてきたとはいえない⁽⁷⁾。アンナは「ペスタロッターにふさわしき妻」として、いかなる苦難においても忍従し、夫を陰になって支えた理想的女性像を提供し続けているといつてよいだろう。

本論の課題は、理想的母親像としてのアンナ像が日本において受容された要因をさぐることで近代家庭教育論における母性愛重視の歴史的社会的意味を明らかにすることにある。そこで本稿では、ペスタロッターのいう母性愛の内実を示し、それとの比較において日本で受容されたアンナ像の特質を示す。次に日本における理想の母親像としての良妻賢母主義との関連でアンナ像受容の歴史的社会的意味について検討する。

1. ペスタロッター教育学における母性観の内実とその歴史的意味

(1) ペスタロッター教育学における母性観の内実—道徳・宗教教育との関連で—

ペスタロッター教育学における母性愛の重視は、スイスにおける近代化のなかで、封建的秩序にかわる人間結合の基礎を形成するという社会的役割をもっている⁽⁸⁾。ペスタロッターは、革命を洞察し、政治体制の変革ではなく、むしろ政治体制を構成する人間を形成する教育の改革が重要だと認識する。新しい社会には、それにふさわしい人間を育成することが必要なのである。新しい社会の原型を、ペスタロッターは1291年の盟約当時のスイスに求める。自主的な人間が、愛によって結合する社会、それがペスタロッターの求める社会である。そこで人間教育の課題は、母性愛に

よって自己克服力をそなえた人間を育成し、愛情による人間結合を可能にすること、すなわちスイス的な社会結合を再興すること、にあると考えられる。この意味で母性愛が重視されたのである。このことは、ペスタロッターの母性観が、時代の道徳・宗教教育と深いつながりをもっていることを示している。

ペスタロッターが道徳・宗教教育論を体系的に構想しはじめたのは、1798年のスイス革命以降である。1798年以降のスイスは、ヘルヴェーチア共和国時代 (1798—1803)、調停時代 (1803—15)、復古時代 (1815—30) と、保守と革新が入れ代わった時代であった。こうした変動の時代のなかで、ペスタロッターの母性観は、道徳・宗教教育論の深化とともに質的変容をとげている。

スイス革命前に執筆された名著『隠者の夕暮 Abendstunde eines Einsiedlers, 1780』に述べられているように、1780年代のペスタロッターの道徳・宗教教育論の基本的原則は、「自然の道 Bahn der Natur」を探究し、それにそった形で子どもの発達を促すことにあった。彼によれば「満足している乳飲み子は、その道 [自然の道…注・鈴木] において母が自分にとって何であるかを知っている。しかも母は幼児が義務とか感謝とかいう音声も出せないうちに、感謝の本質たる愛を乳飲み子の心に形作る。」⁽⁹⁾

人間の最内奥にあって、自己の安らぎを求める感情が、「自然の道」の基礎であり、それはやがて神への信仰へとつながる。「単純と無邪気、感謝と愛とに対する純粋な人間的の感情が信仰の源泉である」⁽¹⁰⁾からである。彼にとって「神は人類に最も近い関係」であり、「神に対する信仰は、すべての知恵とすべての浄福との源泉であり、かつまた人類の純粋な陶冶へいたる自然の道でもある」⁽¹¹⁾。こういう点から考えて、ペスタロッターは宗教性の基礎として人間の感情や感性を重視し、感情や感性から信仰へといたる個人的内的な道すじを、「自然の道」とよんだといえる。「自然の道」にそった発達のプログラムは人間に内在しているのであり、環境を整えれば人間は「自然の道」にしたがった発達を遂げることができるというのである。

こうした連続的な道徳・宗教教育論を深化させる大きなきっかけとなったのが、かのフランス革

命である。1789年に勃発したフランス革命は、ルソーを信奉し、革命に期待をかけていたペスタロッチーを失望させるものであった。革命後、フィヒテとの出会いに刺激されて執筆した『人類の発展における自然の歩みについての私の探究 *Meine Nachforschungen über den Gang der Natur in der Entwicklung des Menschengeschlechts, 1797*』には、人間観の深化が如実に示されている。

この著作のなかでペスタロッチーは、人間を自然状態、社会的状態、道徳的状态の三状態においてとらえる見解を示している。ここで彼は、道徳状態を人間が求めるべき最高の状態として設定するとともに、その状態をもたらす主体が「わたし自身」であることを言明している⁽¹²⁾。『隠者の夕暮』において示されていた、感情や感性からの宗教性への連続的発達是否定され、かわって非連続的な契機が示される。彼によれば人間は、本来の自己である自然状態への憧憬をもちながらも、人為的に作られた社会的状態のなかで「中間的存在」として存在せざるをえない。しかし社会的状態のなかでの自己の「奇形化」にとどまることのできない人間は、「いのちがけの跳躍」をへて、道徳的状态へと高まることを求めるのである。

彼によれば、「道徳は個人においては、自己の動物的本性ならびに社会的諸関係と最も緊密に結び合っている。しかしその本質から見れば、道徳はまったくわたしの意志の自由にもとづいている。すなわち道徳は、わたし自身をわたしの動物的欲望から自由なものとして、わたし自身のうちに感ずることができるという、わたし自身の性質にもとづいている」⁽¹³⁾。感性的な動物的な側面が人間に内在することを認めるとともに、それを超えて人間的に高まろうとする意志もまた人間に内在することが示されている。こうした発想の転換が、『ゲルトルート児童教育法 *Wie Gertrud ihre Kinder lehrt, 1801*』のなかで、道徳・宗教教育の方法論として示されている。

『ゲルトルート児童教育法』第13信、第14信は、道徳・宗教教育論をとりあつかった部分であるが、ここでの問題提起は、神の概念はどのようにして人間の心のなかに芽生えるのか、という点にある。その答えとしてペスタロッチーが示すのは、「愛と信頼と感謝の感情、ならびに従順の能力は、わたしがそれらを神にささげることができるまえ

に、わたしのうちに育成されていなければならない」⁽¹⁴⁾ということである。そしてそうした感情が生まれる源泉として、母親と子どもとのあいだに見られる関係をあげている。なぜなら、「信仰によって神に帰依するすべての感情の萌芽は、その本質からみて、幼児がその母親への愛着を生みだす萌芽と同じもの」⁽¹⁵⁾だからである。

この萌芽が、そのままでは実を結びえないとするとともに、ペスタロッチーの新たな見解が示されている。彼によれば、「わたしの教授法の本質はすべて幼な子と母とのあいだに見られる自然の関係から出発するが、それは本質的には、ゆりかごの時期から教授を母と子との自然の関係に結びつけ、それを連続的な技術によって創造主に対するわたしたちの帰依が依存する情調と同じ情調のうえに、うち立てようとする技術にもとづいている」⁽¹⁶⁾。人間の感情や感性と宗教性との断絶を認めたくえで、それでもなおそれらを結合するために、教育技術を必要とする立場を示しているのである。

この際、もっとも重要なことは、母親がこの断絶を自己の愛情でもって結合することである。母親は「神の代理人」であり、宗教性の基礎を培う存在である。ペスタロッチーの道徳・宗教教育の実質的基盤を担うのは、母親の愛であることがここで強調されているのである。ただし、この時点ではペスタロッチーは、母親に自然的に備わる、いわば本能的母性愛を重視しており、母性愛の覚醒が必要だとしている。

『ゲルトルート児童教育法』において、母親の愛情を重要な契機とした道徳・宗教教育論は、『わが時代およびわが祖国の純真、誠意ならびに高潔な精神に訴える *An die Unschuld, den Ernst und den Edelmuth meines Zeitalters und meines Vaterlandes, 1815*』においては、「生活の道 *Bahn der Leben*」に統合されている。感性から宗教性への断絶は意識されているが、その断絶は、家庭における生活現実のなかで解消されうることが示され、より内的連続的な発達観が示されている。

彼によれば、「道徳性は未発達な感性的な愛から発芽」し、「感性の死から、その花咲く春の危険を凌いで、見識へ、すなわち発展した道徳性の意識へ向かっておもむろに静かに生長」⁽¹⁷⁾する。ここには、感性的な存在から、「いのちがけの跳躍」

を通して道徳性へと高まるといふ、『人類の発展における自然の歩みについての私の探究』の視点が保持されている。しかし、『人類の発展における自然の歩みについての私の探究』において厳しく区別された感性と宗教性とのへだたりは、家庭生活のなかで、母親の心くばりによって、超えられる可能性が示されている。

彼によれば、「信仰の力は人類のあらゆる他の諸能力と同様に、根源的かつ自主的に子どものうちに宿っている⁽¹⁸⁾」。信仰の力を発達させるのは、陶冶された母の道徳性と、道徳的な母によって構成された家庭生活とである。彼によれば、「子どもの愛はこの生活をつうじて自己自身を認識し、洞察するよう高められ、それによって自己自身、純化された高潔な精神へと高められる。子どもは愛のなかで人間的に高められて道徳的存在となる⁽¹⁹⁾。」

このように道徳性、宗教性への発達の契機は、道徳的に陶冶された母によって構成された家庭生活のなかにあるのであり、その意味で家庭生活を組織する母親の道徳性や能力が重要であるといえる。このことはまた、本能的母性愛から理性的母性愛の重視への、母性観の質的変容を意味している。

この点に関して、幼児教育に関する唯一の体系的な著作である『幼児教育の書簡 Letters on early Education, 1818-19』をみると、このなかでペスタロッチーは、「思慮深い愛 a Thinking Love」としての母性愛の必要性を指摘していることがわかる。『ゲルトルート児童教育法』において、母性愛の覚醒を求めているのとは異なって、ここでは母親の愛情の質が問題にされているのである。

彼によれば、子どもに内在する根源的な力は「信仰と愛の力 an active power of faith and Love」である。これは、人間を他の動物と区別する力でもある。もちろん、人間には感性的な動物的な欲求が内在しているという視点は保持されているが、それをコントロールし、人間的な「信仰と愛の力」へと導くことが教育においてもっとも重要なことだとされている。

彼によれば、感性的な動物的な欲求を満足させるとともに、それをコントロールする力を身につけさせ、子どもに「信仰と愛の力」を育成するの

は、「思慮深い愛」としての母性愛である。それには、自然に母親にそなわる愛情に加え、教育された知性を必要とする。つまり、「母親が自分の愛をできるだけ強く働かせ、しかも自分の行為においては思慮によって愛を調節すること」が求められるのである⁽²⁰⁾。この意味で、母親の愛の質が重視されるのである。

こうして母親の愛情の質を問題にすることにより、母親教育の必要性が示されるとともに、幼児教育の一般化への方向性が切り開かれたといえよう。ペスタロッチーが晩年において、イヴェルドン女子学校を設立したこと、また施設保育を重視したこと⁽²¹⁾がここから理解されるのである。ただし、教育において母性愛を重視するだけであるなら、それはペスタロッチーに独自のものであるということとはできない。社会史的にみれば、母性愛の重視は時代思潮でもあったからである。

(2) 歴史的にみたペスタロッチーの母性観の独自性

まず、19世紀当時におけるヨーロッパの状況をみると、バダンテールたちの研究によって明らかにされたように、母性愛は19世紀のはじめころから社会的に注目されるようになったといえる⁽²²⁾。「自分の子どもを育てるために、しかも自分のでもと大切に育てるために、自分を犠牲にするという考え」⁽²³⁾を受け入れた「近代的な母親」あるいは「新しい母親」たちは、「主に中間の階級、すなわち中流ブルジョアジーに属していた」⁽²⁴⁾。このことは、近代社会の成立を推進したブルジョアジーの家族構成が、それまでの共同体的社会構成にとってかわったことを示している。社会史的にみれば、「近代的な家族、すなわち母性愛の上に築かれた家族」⁽²⁵⁾の成立は、近代の大きな特徴のひとつなのである。

母性愛はとくに子どもの教育において重視されるが、それは子どもの自然的欲求を満たすという意味においてだけでなく、また社会的利益という観点からも注目される。バダンテールによれば、「母性愛は、幼児の必要性ときわめて緊密に結びついているが、それにおとらず緊密に、家族や社会の大切な利益と結びついている」⁽²⁶⁾。すなわち、母性愛の役割は子どもに乳を飲ませて栄養を与えることにはなく、むしろそのことによって

得た愛着をもとにして子どもをしつけることにある。この意味で、母性愛の重視は、家庭における女性の地位上昇と関連し、子どもを育てることにおいて、社会的な役割を女性に与えることになったといえよう。

このように母性愛への着目はペスタロッチーに特有のものではない。ショーターが指摘するように、18世紀から19世紀のはじめころまでは、親が幼児に対して関心をもたないのがふつうであった⁽²⁷⁾。ショーターは、母親が幼児に関心をもつようになったのは、近代社会の特徴のひとつであり、そこで「幼児に対する純粋な母性愛、つまり、自発性と感情移入にもとづいた母親の愛」⁽²⁸⁾が誕生したと指摘している。母性愛への着目は、いわば時代思潮だったのである。

ペスタロッチーに特徴的な点は、母性愛重視を労働者階級に対しても徹底した点にある。ペスタロッチーが思索の対象とした階級は基本的には18世紀当時のスイスの中産階層（Mittelstand）である。スイスの中産階層は、19世紀以降階級的な意味での中産階級と労働者階級に分化していく。ペスタロッチーの時代はその過渡期にあたる。したがって中産階層を対象としたペスタロッチーの思索は、社会変動につれて中産階級と労働者階級を含まざるを得なくなる。こうした時代の特徴がペスタロッチーの母性観にも反映されている。

スイスにおける家族史についていえば、ペスタロッチーの時代は家族の解体の初期であり、家族が家庭外の労働への従事をよぎなくされたこと、近代社会のもつ社会的変動性の力によって家族が脅かされたことが指摘されている⁽²⁹⁾。このことは、共同体的家族結合を主たる基盤とした社会構造がゆらぎ、代わって母親を中心として結合する個別家族が成立しはじめていたこと、そうした状況のなかで近代資本主義の進展によって個別家族の経済的基盤が不安定になってきたことを示している。その結果、「19世紀の産業革命は婦人労働の性格を変え」、「〈家事労働〉とよばれる範囲に限定されていた」婦人労働が、家庭外への労働へとその範囲を拡大したことが指摘されている⁽³⁰⁾。

このことは、ヨーロッパにおけると同様、スイスにおいても母親を中心とした個別家族が成立しつつあったという歴史的事実とともに、その個別家族において母親がもつはずだった子どもの教育

という役割を、放棄せざるをえない状況がおりつつあったことを示している。こうしたなかで、ペスタロッチーは基本的には幼児教育における母親の意義を強調しながらも、施設保育を認める見解を示している⁽³¹⁾。これは母親を中心とした個別家族を形成する中産階級においては母親による教育を、社会変動によって母親の家庭外労働を余儀なくされる労働者階級においては施設保育をと、彼の複眼的な見解の現れなのである。

このようにペスタロッチーは、母性愛の教育的意義を強調しつつも、スイスにおける近代資本主義の進展につれて母性観を変容させ、晩年においては就学前教育施設であるキンダーハウスの意義をも認めているのである。母性愛への着目は時代思潮のひとつであったが、そうしたなかでペスタロッチーの独自性は、母性愛に着目しつつも時代的要請にこたえることで母性観を変容させたことにある。ここからペスタロッチーの母性観には、母親が自然的に備える本能的な母性愛と後天的に形成された理性的母性愛との二側面が含まれているといえるのである。

2. わが国における良妻賢母主義の成立とアンナ像の受容

(1) 日本において最初に受容されたアンナ像

では日本において受容されたペスタロッチーの母性観はどのようなものであったのであろうか。これをペスタロッチーの理想的母親像ともいえるアンナ像の日本への受容という点から検討することにする。

日本において最初にアンナの生涯が紹介されたのは、ペスタロッチー全集の編者であるザイファルトによる、「Frau Pestalozzi」の翻訳、『ペスタロッチーに相應しき妻アンナ』である。この書は、ペスタロッチー百年祭に際して翻訳出版された⁽³²⁾。

原著者であるザイファルトは序のなかで、「この気高き夫人、信心深き殉教者、人類の最大恩人であるペスタロッチーと辛酸を共にした人、困難なりしペスタロッチーの生涯に於て多数の人間の中から彼にとってたった一人の最大恩人であった、斯る人の伝記の単行本がまだ世の中に無い」⁽³³⁾ことを憂い、この書を著したと述べている。

ザイファルトによるアンナ評価をこの著作のなかでみてみると、大きく分けてふたつの側面があ

ることがわかる。それは第1にペスタロッチーに対して感情的な意味で献身的なアンナであり、第2に知的、理性的な意味でペスタロッチーを支えるアンナである。第1点についていえば、ノイホーフでは、アンナは、家政や子どもの教育や世話を「すべてきちんと秩序立て、また愛に満ちた尊敬すべき力でよく治めてくれたので、みんなから非常に尊敬され、愛されていった」⁽³⁴⁾こと、さらに事業の失敗の際には、誰からも相手にされなくなったペスタロッチーに対し、「少しも不平を云わず、注意と細心のありたけを盡して彼の困難を軽くしようとして」いたことをとりあげ、その姿を「いじらしい」と述べている⁽³⁵⁾。

またペスタロッチーが、シュタンスに赴任した折りも、「優しき妻アンナ」は「ノイホーフに居て、思ひにまかせぬ境遇をどんなにかこった事であろう。日の登る朝、日の沈む夕どれ程神に夫の健康を祈ったことであろう」と述べ、グルニゲルでの養生の際には、「アンナは飛んでいってあつい看護をした。その心からの慰めはペスタロッチーを間もなく回復させていった」⁽³⁶⁾とある。その真偽のほどは別として、母親のような心遣いでペスタロッチーを見守るアンナの姿が記されている。

こうした献身的な側面とともに、アンナの知的・理性的な側面についてもいくつか述べられている。ブルクドルフにおけるアンナは、「老いた勝れた夫人である。彼女は学校の経済的方面や、彼女の夫の手紙の一部を受けもって居る。彼女は実にペスタロッチーを創造して行く様に思える」⁽³⁷⁾と、トルリッツ (Torlitz) によって報告されている。またイヴェルドンでは、ペスタロッチーの助手たちに対する忠告者であり、学園の危機に際しては、ニーデラー (Niederer, J.) を諭したり、経済的な工面をして急場を救ったりして、学園の維持に尽力したことが述べられている⁽³⁸⁾。

ただ、全体的な評価としては、「母ペスタロッチーは決して夫の偉大な教育事業に手出しをすると云う様なでしゃばりではなかった。彼女は決して自分の事が公にされることを欲しないでいつも陰に隠れていた」といった「謙遜な内気」や、「従順な忍耐」や「信心深い辛抱さ」でもって「内助の実」をあげた点が評価されているとあってよい⁽³⁹⁾。これが、わが国で最初に紹介されたアンナ像である。

(2) 日本における良妻賢母主義とアンナ像の受容との関連

前述したように、ペスタロッチーは晩年には、本能的な意味での母性愛だけではなく、教育された理性的な母性愛をも重視している。しかしアンナ像の受容においては本能的な意味での母性愛が強調されているといえる。この点について、アンナ像の形成とわが国における良妻賢母主義の形成との関連をみることは興味深いことである。

良妻賢母主義は、わが国の近代化の過程のなかで形成された、日本独特の女性像である⁽⁴⁰⁾。ここでは、わが国で最初に作られた幼稚園が、女子教育の振興を目的としていた点に着目し、職業婦人と家庭婦人の育成について明治政府がどのように捉えていたのかという視点から分析を加えることにする。

明治9 (1876) 年に創設された、日本初の幼稚園である東京女子師範学校付属幼稚園は、その大きな目的のひとつとして、女子教育の振興をあげている。当時の文部大輔田中不二麿は、女子師範学校設立の伺書のなかで、女子師範学校設立の必要性について、「女子ノ性質婉静審ニ能ク其教科ヲ講習スルヲ得ルノミナラス、向來幼稚ヲ撫育スルノ任アレバナリ」⁽⁴¹⁾とし、女子師範学校設立当初から幼稚園を敷設させる計画をもっていた。明治8 (1875) 年11月29日に女子師範学校が開校され、はやくも翌年11月16日には付属幼稚園の保育が開始されているのはこのためである。このように幼稚園は、女子教育の必要という観点から設立されたのである。

この点を当時の女子教育論との関連でみると、「学制」(明治5年)の影響があることがわかる。「学制」と同時に提示された「着手順序」によれば、「人間ノ道男女ノ差有ルコトナシ男子己ニ有学女子学フ事ナカル不可」⁽⁴²⁾である。とくに女子は後に母親となり、「其子才不才其母ノ賢不賢ニヨル」から、「一般ノ女子男子ト等シク教育ヲ被ラシム」⁽⁴³⁾という論調、つまり母親としてのあり方が子どもに影響するから、男子と同じように女子にも教育が必要だとする考えは、当時の女子教育振興策の重要な視点だったといえよう。東京女子師範学校は、その具体的現れのひとつだったのである。

しかし「女教師の必要性が説かれた割りに、女

教員養成は軌道に乗らなかった⁽⁴⁴⁾。女性が働くことに対する心理的な抵抗が強かったのである。こうした傾向が転換するのは、明治28(1895)年ころからである。このころから国家と関連させて女子教育を説く傾向が強くなり、女子教育が国策として捉えられるようになった。その要因としては、日清戦争の体験によって女子を国策の受けとめ手とする必要性が生じたこと、条約改正にもなって外国人の国内居住が予想されたため、女子に日本人としての自覚を植えつける必要が生じたこと、婦人労働者の量的な増大と質的な変化にもなって、良妻賢母主義を強化する必要性が生じたことがあげられている⁽⁴⁵⁾。

ただし最初から女子教育は、家庭人としての女性や母親の育成のみを目的としたものではなかった。当初においては、むしろ国策のにない手としての女性が期待されていたのである。しかし、国策のにない手としての女性を求めることは、家族国家の支え手としての女性を求めることと矛盾せざるをえない。「一方において国家の支え手を要請し、その妨げとなるなら、儒教的女性像を打破せざるをえない。他方、家族国家的な見地から、女性の従が必要であり、視野を広めた結果、欧米の女性のように、真の対等を主張するようになるのは阻止せねばならない⁽⁴⁶⁾」のである。

こうして欧米的でも儒教的でもない新しい女性像が必要とされる。それは、「従来の家の中に閉じこもった家庭人と異なって、新しい使命感に燃え、国家的な視野を持ちながら、家庭の中で本分をつくす女性が教育の理想像として措定される。そして、在来の家庭人と一線を画した、新しい妻、母として『良妻賢母』が叫ばれることになる⁽⁴⁷⁾」。良妻賢母主義は、国策として女子労働を確保するとともに、国体である家族国家を維持するために作りだされたものであるといえよう。したがって良妻賢母主義には、「国家のにない手であると同時に家のささえ手」という二面性が含まれることになるが、二者択一を迫られた場合、まず家のささえ手としての従を優先するのが理想であった。家族国家の視点からみれば、女子が家庭を支えなくなれば、家の拡大されたものである国にも影響を与える。そこで、女子の本分として家庭での育児が第一義のものであり、それこそが女性の使命であるとのイデオロギーを浸透させる必要性が生

じたのである⁽⁴⁸⁾。

こうして形成された良妻賢母主義の影響は、「幼稚園令」のなかにもみられる。大正15(1925)年に制定された「幼稚園令」には、「幼稚園ハ幼児ヲ保育シテ其ノ心身ヲ健全ニ発達セシメ善良ナル性情ヲ涵養シ家庭教育ヲ補フヲ以ッテ目的トス⁽⁴⁹⁾」と定められている。ここには、幼稚園教育を家庭教育の補完とみなす視点が示されている。つまり、家庭教育は本来母親の役割であり、それができない場合に、施設保育でもってそれを補うということである。

このごろすでに女子労働が増加していたことは、「幼稚園令」の「施行規則制定ノ要旨並施行上ノ注意事項」に伺える。ここでは、「…殊ニ社会生活日ニ複雑を加ヘ一家ノ事情意ヲ子女の教養に専ラニスルコト能ハサル者漸クオオカラムトスル今日ニアリテハ幼稚園ノ任務ハ益々重要ノ度ヲ加ヘサルヲ得ス…⁽⁵⁰⁾」として、保育時間の延長と3歳未満の乳幼児の保育が認められている。幼稚園は託児所的機能をもつようになっているのである。それにもかかわらず、原則として「家庭教育ヲ補フ」ことが目的としてあげられているのは、女子の本分は家庭にあるという良妻賢母主義の影響によるものであるといえよう。女性には家庭における育児の役割が与えられ、母親として生きることが女性の理想という考え方がここにもみられるのである。

この観点は、前述した理想的母親像としてのアンナ像と一致する。前述したように、『ベスタロッターに相應しき妻アンナ』のなかにも、理性的な教養あるひとりの女性としてのアンナ像が示されていないわけではない。けれどもそうした女性像は、日本の近代化政策において必要とされた女性像とは相いれないものであったと思われる。そのため、教養あるひとりの女性としてのアンナ像はとりあげられず、ベスタロッターを支えた献身的な自己犠牲的な女性像のみが強調されることになったのではないだろうか。

おわりに

以上述べてきたように、わが国におけるアンナ像の受容には、近代化の過程において形成された良妻賢母主義との関連があるように思われる。良妻賢母主義も、本来は女性に男性と同様の理性や

知性を求めるところから生じているのだが、近代日本における家族国家主義イデオロギーの枠組みからではできなかつたのである。したがってアンナ像の受容も、日本における家族国家主義イデオロギーの枠内であつたと考えられる。自分の意志に従つた強い女性としてのアンナではなく、夫を陰で支えた忍従する女性としてのアンナが強調されたのもこの点から説明できるといえよう。このように、アンナ像の受容は時代における家庭と国家との関係を示しているともいえる。

前述したようにペスタロッチーは、当時勃興しつつあつた中産階層に思索の原点をおいている。近代に形成されていく個別家族は原則的に中産階級の実態とイデオロギーを反映している。近代革命によって形成される政治体制は、とくに後進国スイスにおいては二重構造をとらざるをえない。中産階級は反革命分子でもある貧民層や労働者階層を内包する形で、革命を遂行せざるをえないからである。そもそも内包されていた問題性は、スイスにおいては中産階層の分化にしたがつて、実態としての労働者層、貧農層において具現化される。とりわけ中産階級のイデオロギーとしての母性重視は、労働者階層、貧農層の女性を抑圧するとともに、実態としてこれらの階層の子どもたちの発達を妨げる結果となるのである。こうした点からみたとときペスタロッチーの母性観は、階層を超えて実現されるべき子どもの発達保障の観点を示しているといえよう。

このようにペスタロッチーの母性観は、時代の階層性を反映しているものであり、そうした時代解釈なしに母性愛重視の思想のみを受容した場合、それは形式的受容となるだけでなく、本来の意義さえも失わせてしまう結果となる。すなわち単なる母親崇拜となつて、実質的な子どもの発達保障を妨げる結果となるのである。

ここから近代家庭教育論における理想的母親像は、それを形成する階層のイデオロギーを反映していることが予想される。日本におけるアンナ像受容の形式も、近代化を押し進めた階層を示していると予想されるのである。この点については稿を改めて論じたい。

[注]

(1) 拙稿「スイスにおけるペスタロッチー研究の

新しい動向」(日本教育学会編『教育学研究』第63巻第3号、1996年)329-330ページ、参照。

(2) Vgl. Tröhler, D.: Hauptströmungen und Tendenzen der Schweizer Pestalozzi-Forschung (in: Pädagogische Rundschau, 1996, 1-2).

(3) Vgl. Neue Züricher Zeitung, Montag, 15. Januar 1996.

(4) 拙稿「ペスタロッチー研究の新たなる地平」(日本ペスタロッチー・フレーベル学会『人間教育の探究』第8号、1996年)62-63ページ、参照。

(5) Auf den Spuren Pestalozzis, Pestalozzianum, 1996, S.43.

(6) Ebenda, S.82.

(7) アンナに関する事柄はペスタロッチーの自伝のなかでは述べられているが、体系的著作となると日本では、『ペスタロッチーに相應しき妻アンナ』が1927年に出版(1969年再版)されているにすぎない(日本ペスタロッチー・フレーベル学会編『ペスタロッチー・フレーベル事典』玉川大学出版部、1996年、「ペスタロッチー関係文献リスト」参照)。

(8) 拙著『ペスタロッチー教育学の研究』玉川大学出版部、1992年、178-179ページ、参照。

(9) Pestalozzi Sämtliche Werke, Kritische Ausgabe, hrsg. von Ed. Spranger usw., 1927ff (以下 P. S. W. と略す) Bd. 1, S.271.

(10) Ebenda, S.274.

(11) Ebenda, S.273.

(12) P. S. W., Bd. 12, SS.129-130.

(13) Ebenda, S.165.

(14) P. S. W., Bd. 13, S.341.

(15) Ebenda, S.344.

(16) Ebenda, S.350.

(17) P. S. W., Bd. 24A, SS.171-172.

(18) Ebenda, S.174.

(19) Ebenda, S.173.

(20) P. S. W., Bd. 26, S.49.

(21) 1806年にはイヴェルドン女子学校を設立し、女性教師の養成をおこなっているし、『リーンハルトとゲルトルート Lienhard und Gertrud, 1820』では、就学前教育施設であるキンダーハウスの必要性を認めている。

(22) E. Badinter: L'amour en plus, Paris, 1980,

- P.75. (鈴木晶訳『プラス・ラブ』サンリオ、1981年)
- (23)Ebenda, S.196.
- (24)Ebenda, S.208.
- (25)Ebenda, S.42.
- (26)Ebenda, S.253.
- (27)ショーター, E. 田中他訳『近代家族の形成』昭和堂、1987年、178ページ。
- (28)同前書、176ページ。
- (29)Schweizer Lexikon, Zürich, 1945-1948, SS.207-212.
- (30)Ebenda, S.627.
- (31)P. S. W., Bd. 5, S.274, Bd. 6, SS.497-498.
- (32)ザイファルト原著、市村秀志譯補『ペスタロッチーに相應しき妻アンナ』玉川學園出版部、1927年、6ページ。(なお、引用にあたっては現代かなづかいに改めた。)
- (33)同前書、13ページ。
- (34)同前書、81ページ。
- (35)同前書、82ページ。
- (36)同前書、141ページ。
- (37)同前書、143ページ。
- (38)同前書、153-154ページ。
- (39)同前書、20-21ページ。また、1927年にかかれた「ペスタロッチに及ぼせる女性の影響」という論文のなかでは、アンナは、「高潔なる心情」と「天稟の才能」を有した「意志の強い人」として評価され、ペスタロッチの事業にとって「隠れたる功績」があると述べられている。このなかで、ペスタロッチに与えた女性の影響がとりあげられてはいるが、最終的な結論は、「女性の声や力には優はしい、なつかしいものがあらねばならぬ。此優しさとなつかしさは唯知的修養では出来るものではなく、真に自然と母性愛や宗教愛からでなければならない」ということであり、「女性は人としての天分をつくす前に、母性としてまたは婦性としての愛を發揮せねばならぬ。真に子を愛し夫を愛することが出来ずして如何にして人を愛し社会を愛し、神を愛することが出来よう」と、家庭における女性の位置づけがなされている。この論文を読むかぎり、アンナの意志の強さや才能を認めているとしても、それは女性的な分野に限られているといえる(龍山義亮「ペスタロッチに及ぼせる女性の影響」、全国小学校総合女教員会『かがやき』1927年4月号、所収)。
- (40)深谷昌志『増補 良妻賢母主義の教育』黎明書房、1990年、11ページ。
- (41)日本保育学会編『日本幼児保育史』第1巻、フレーベル館、1968年、88ページ。
- (42)梅根悟監修『世界教育史大系34 女子教育史』講談社、1977年、218ページ。
- (43)同前書、218-219ページ。
- (44)同前書、239ページ。
- (45)深谷昌志、前掲書、157-165ページ、参照。
- (46)同前書、143ページ。
- (47)同前書、147ページ。
- (48)この良妻賢母主義は、明治32(1899)年の高等女学校令によって、わが国の女子教育の基本的方向性となる。そして良妻賢母主義に方向づけられた女子教育は、わが国の国体である家族国家の重要な一翼を担うことになったのである。
- (49)『日本幼児保育史』第3巻、304ページ。
- (50)同前書、309ページ。